

#### 大塚和との邂逅(5) 日活のこと④

1954年からの製作再開の時期から1971年の一般映画製作の終了の時期にかけては大量の作品が公開されました。量産体制のもとで基本的には週替わりで作品が提供されたのですからまさにフル稼働の時代だと言えるでしょう。しかし、プログラムピクチャと呼ばれる作品群の多くは、何ら新鮮味がなく旧態依然とした澁んだ印象を強く受けることもあります。例えば大塚和の企画作品を最も多く撮っている若杉光夫「脅迫の影」(1959)、野口博志「殺人計画完了」(1956)、古川卓巳「逆光線」(1956)といった作品(その他にも数多くあるのですが、最近見て感じた作品)には感動もなければ新味にも欠け失望感しか残らない一方で、長谷部安春「みな殺しの拳銃」(1967)、蔵原惟繕「黒い太陽」(1964)には独自色と映像美を見出すことができ、躍動感を感じ、映画を見ることの喜びを覚えるのです。特に「黒い太陽」における金宇満司(当時は岩波映画に所属していた新人カメラマン)のカメラワークは意欲的であり、さまざまな試みを駆使する姿勢は特筆に値しますし、「みな殺しの拳銃」における長谷部安春の映像美学には圧倒される思いです。これこそ日本映画を支えたプログラムピクチャの面目躍如たるものがあります。しかし、ここで引き合いに出した長谷部安春作品がすべて素晴らしいとも決して言えるわけではありませんし、先ほど批判した若杉光夫には「七人の刑事 終着駅の女」(1965)、野口博志には「俺の拳銃は素早い」(1954)、古川卓巳には「拳銃残酷物語」(1964)といった十分満足できる作品があるのです。光る作品はあくまでもほんの一握りのものです。それは玉石混淆の状況であり、だからこそ「玉」に出逢ったときの感動が大きいのです。こうした玉石混淆の状態から「玉」として出現した先品の中には。前述の長谷部安春「みな殺しの拳銃」(1967)「流血の抗争」(1971)蔵原惟繕「黒い太陽」(1964)に加えて、西河克己「生きとし生けるもの」(1955 橋本忍脚本) 中平康「当り屋大将」(1962 新藤兼人脚本) 新藤兼人「銀心中」(1956 新藤兼人脚本 中平康助監)といった作品が真っ先に頭に浮かびます。

ここで、一旦書いたことに、多少なりとも反省し見解を改めるべきと考え、申し述べると、「プログラムピクチャと呼ばれる作品群の多くは、何ら新鮮味がなく旧態依然とした澁んだ印象を強く受ける」と書きましたが、このスタイルこそが当時の極く通常の作品としての価値であったのではないかということです。最も安定した形態はマンネリであることからすれば、下手に目新しいことを避け、従来の伝統的手法を用いて映画制作することは会社側にとっても作り手にとっても安心できる状態であったはずで、また、この辺りのことが、「職人的技巧」とか「職人芸」と言われるものではないかと考えるのです。美学的傾向や芸術的方向性(「芸術」とは何かの議論は措くとして)が希薄な場合に使う「職人的」という表現は論外であり、まさに「芸」の域にまで高めた制作手法と言うべきでしょう。「芸」は、広辞苑にあるように、修練によって得た技能、学問、わざなのですから。

さて、今見れば手のつけられないようなつまらない作品ばかりだったかと言えばそうではなく、時として驚くべきベストテン級のユニークな秀作も出現するのです。映画作品のベストテンについて、筆者はキネマ旬報社に全幅の信頼を置いている訳ではなく、むしろこれまでの経営母体の変遷を考えれば胡散臭さを感じることもあるのですが、1924年から始まった世界的にも最古のベストテン選出を一つの参考資料として扱うことにします。日活の製作再開となった1954年には日活作品のベストテン進出はなく、1955年になって久松静児「警察日記」(6位)、田坂具隆「女中っ子」(7位)の二本がランクインし、1956年は、市川崑「ビルマの豎琴」(5位) 1957年川島雄三「幕末太陽伝」(4位)、1958年はなし、1959年は今村昌平「にあんちゃん」(3位) という結果です。1955年から1959年までの五年間のベストテン作品50本の製作会社別の状況は、松竹13本、東宝11本、東映8本、独立プロ系8本で大映と日活が各5本と最も少ない本数となっています。一方で、興行収入ベストテンでは、1955年「力道山 怒濤の男」(森永健次郎 9位 155百万円)、1956年「太陽の季節」(古川卓巳 7位 186百万円) 1957年「嵐を呼ぶ男」(古川卓巳 4位 349百万円)「錆びたナイフ」(舛田利雄 7位 249百万円)「夜の牙」(井上梅次 8位 237百万円) 1958年「陽のあたる坂道」(田坂具隆 2位 401百万円)「紅の翼」(中平康 3位 365弱万円)「明日は明日の風が吹く」(井上梅次 6位 318百万円) 1959年「世界を賭ける恋」(滝沢英輔 第7位 278百万円)「男が命を賭ける時」(松尾昭典 5位 269百万円)「鉄火場の風」(牛原陽一 6位 243百万円)「天と地を駆ける男」(舛田利雄 10位 197百万円)で、興行収入の面で独占していたとまでは言えないにしろ、一般大衆か

らの強い支持を集めていた証左になります。また、驚くべきことに、1956年以降の興行収入ベストテン入りした作品はすべて石原裕次郎主演作品なのです。

美術家の森村泰昌は、著書の中で「商品」と「作品」に違いについて述べ「商品と作品の境界線は、まあグラデーションですね。商品にも作品的要素はあるだろうし、その逆もある」とし、結論として「『商品』とはあったらいいなの世界である。『作品』とはありえへん世界である」としています。この作品の「ありえへん世界」について、森村泰昌は生前に晩年に描いた一作しか売れなかったゴッホを引き合いに出し、「ゴッホの絵画を『商品』としてとらえるなら、売れない絵画は『商品』として確実に失格です。当時のたいていの人びとにとって（中略）『なんでこんな絵を描くのだろう』と拒否反応を呼び起こしてしまう『ありえへん』世界だった」と説明します。映画としての芸術性や美学的観点にウエイトを置いたとされるベストテン選出（一概にそう言い切れない面があることを承知しながら）に会社として最も少ない本数しか残せない一方で、興行収入でトップテンに半数を送り出した日活（しかも石原裕次郎主演の映画ばかり）は、「あったらいいな」を願う一般大衆の心を捉えた大きな受け皿の役割を十全に果たしていたことが証明されます。（参照 森村泰昌「生き延びるために芸術は必要か」光文社新書）

「あったらいいな」の世界の商品といっても、製作し上映すれば観客の大量動員が可能だった時代は、ほぼ週替わりで供給されていた訳ですが、そうなれば「あったらいいな」の世界も実に商品の寿命が短い期間しか保たなかったと言えます。日活の制作再開当初から中心的存在だった野口博志監督の場合、1955年に7本、1956年にも7本、1957年には11本という商品を送りさしていますが、これははっきり言って異常な状態です。大量生産が可能となれば、経営者はコスト削減と製作工期の短縮を図るのが一般的な傾向であり、一般消費財並みに映画も低予算で早撮りされる商品こそがいい映画とされます。経営者の論理があくまでも優先され、短命の商品が次々と投入される中で、監督を始めとした製作スタッフは厳しい環境と条件の下で撮ることを強いられ、次第に意欲と才能の枯渇を来すという最悪の状況を招くこととなります。1958年を頂点に観客動員数は下降線を辿りますが、これは単にテレビの普及だけの原因ではないでしょう。これは日活だけの問題ではなく、日本映画界全体の問題でもありました。

こうした中で、状況に抗った映画監督たちも現れ、あくまで「作品」を作ることに拘泥し、会社を飛び出しプロダクションを興し、万人向けではない極めて尖鋭的な作品を製作していったムーヴメントです。松竹出身の大島渚、篠田正浩、吉田喜重が代表格ですが、日活でもプロデューサーの大塚和を始めとしたプロデューサー四名（大塚和以下、高島幸夫、三浦朗、武田靖）、監督七名（蔵原惟繕、浦山桐郎、熊井啓、藤田敏八、吉田憲二、河辺和夫、神代辰巳）の十一名で「えるふプロダクション」が1969年に設立されました。いずれも日本映画界に危機を感じ、その建て直しを自分たちの手で極めて意欲的なものでしたが結果的には数本の作品しか世に送り出すことしかできず、1971年に解散します。この時代に危機感を抱いていたのは何も彼らのような中堅・若手監督だけではなく、すでに世界的な名声を確立していた黒澤明、木下恵介、小林正樹、市川崑による「四騎の会」が設立されたのも1969年のことです。しかし、これも短命に終わります。個々人の才能と芸術性だけではなんともし方のない、映画を取り巻く環境がいかに厳しかったのが窺えます。

やはり、この1960年代後半から1970年代半ばにかけては、映画界自体世界的にも危機と波乱の時代を迎えています。アメリカでは、アメリカン・ニューシネマという一大ムーヴメントが起こります。従来のハリウッド型「ハッピーエンド」式の作品から、社会や政治に対する反体制的なメッセージや批判的な視点が入るものへと変化しますが、これはベトナム戦争や公民権運動など多くの社会的、政治的変動が大きく影響していると考えられますが、代表作として、デニス・ホッパー「イージー・ライダー」(1969)、アーサー・ペン「俺たちに明日はない」(1967)、フランク・ペリー「泳ぐ人」(1968)を始めとした秀作が続きます。自浄作用が機能すると思われていたアメリカ映画会ですが、経営環境はいつになってもやはり厳しく、製作システムの変容やM&Aを重ね。シリーズ化とリメイク作品に依存する度合いが高まったのは実に残念なことです。

